

歴博暮らしの植物苑だより

暮らしの植物苑観察会 13:30から 暮らしの植物苑東屋

第116回 11月22日(土) 『古典菊の品種の特徴と大名庭園』
小笠原 亮 (江戸園芸研究家)

第117回 12月6日(土) 『サザンカの文化史』

第4土曜日ではありません 箱田直紀 (元恵泉女学園大学)

今週のみどころ・伝統の古典菊 <http://www.rekihaku.ac.jp>



天女の舞

伝統の古典菊開催中

肥後菊

細川重賢が文化政策の1つとして宝暦年間(1751~64)に始められたと伝えられる肥後菊花壇作り。その後秀島七衛門が栽培法をまとめて「養菊指南書」(1819)を表してから独特の栽培法として広く知られるようになった。

肥後菊の花は全て一重で、花弁の間がすいたものが多いのが特徴である。色は紅、白、黄のものが多い。弁は平弁、管弁、匙弁の三種、花の大きさで大輪(後菊)、中輪(中菊)、小輪(前菊)に分けられ、花色、弁、大きさによって、花壇に作られます。陰陽二体、天地人の三位一体、仁義礼智信の五常を表すといわれています。(菊作りの名人奥技 農文協協会)



肥後菊の舌状花は平弁（細長く扁平）、匙弁（管状になった花弁が細長く、先端が太い耳匙や耳搔き匙を含む）、管弁（管状で細長い）の3型からなり、管状花弁の中央部の太さにしたがって次のように分けられる。太管（2.51mm以上）、間管（1.71.~2.5mm）、細管（1.31~1.7mm）、針管（1.3mm以下）の4種、花径は9から18cm、弁数15~50の晩性咲きである。花弁によって構成される花型は一重咲、平咲、で中央部の筒状花は黄金色、舌状花は広狭よじれ、長短からなる平弁で、隠花として扱うものと、太管、間管、細管の先端に匙からなる陽花として扱うものに区分される。筒状花の周囲に15~50の舌状花が車の車軸のように放射状に着生し、弁数が少なく16弁内外のものが上品とされる。背丈は高性、中性、低性、に分けられ（花の大輪、中輪、小輪と一致する）それぞれ後菊用、中菊用、前菊用に区別される。（肥後銘花集 誠文堂新光社より）

丁子菊

花の筒状花の部分がフトモモ科のチョウジに似ていることからつけられました。

正徳年間（1711~16）に出された「花壇養菊集」に記載された48種のうち、43種が丁子咲の品種であることから、江戸時代に盛んに栽培されていたことがわかります。

（新宿御苑 パネルより引用）



ヤツデ(ウコギ科ヤツデ属)



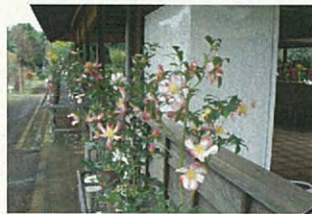
畑ハウス
江戸菊展示



シロダモ(クスノキ科シロダモ属)



ナンテン(メギ科ナンテン属)



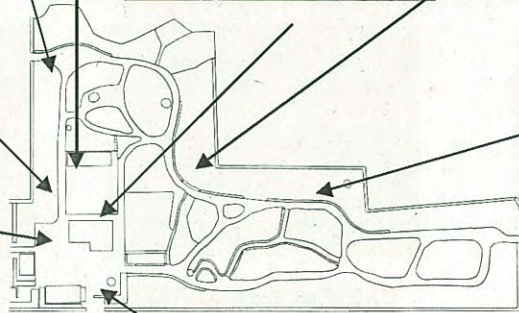
東屋周囲
サザンカ展示



ヒサカキ(ツバキ科ヒサカキ属)



江戸菊展示



肥後菊展示



池上紅(サザンカ群)